

野村四郎師 能楽師シテ方に 能の観かたを聞く

日本の古典舞の「能楽」、その能役者の野村四郎さんは、いま最も賑わっているシテ方である。シテ方とは能の舞台上で主役を務める役者のこと。

能楽には能狂言がある。野村さんの父上は人間国宝だった和泉流狂言役者六世野村萬蔵である。

狂言の家には生まれ、四人兄弟共に幼少から狂言師になる教育を受けたが、能に魅せられてひとりでだけ能役者になって今日に至ったのだ。

伝藝芸術を伝える家の修行はどのようなものでしょうか

野村 父の教育はスバルタ教育で、子供には怖かったものです。明治の人はそれが当たり前で、芸ばかりじゃなくて精神をも鍛える目的があるのです。今ではそれが理解できませんが、子供にそんなこと理解できません(笑)。ただただ、おっかないおやじだ、稽古がいやだなと思つばかりでね、学校から帰って、おやじがいるかいないか大問題でね(笑)。

父に対して肉親の父親と感ずるよりも、鬼か蛇かとまではいわないけど(笑)、普通の家庭の親子関係とはかなり違つものでしたね。だから逃げ出して能のシテ方になつたのじゃないですか(笑)。

能と狂言はひとつの舞台上で生まれた兄弟のようなものですが、それぞれに磨かれ発展してきました。狂言の稽古はまず舞いと謡いからです。能と同じです。舞うことで姿勢、謡うことで発声を訓練してまず肉体をつくる。次に泣いたり笑つたりの稽古になります。狂言は笑いの芸と思われていますが、能とともに武家社会で生きてきたので、現代のテレビ流のお笑いとは違います。

そうやって子供のときから父親のお供で能楽の場に入りながら狂言の修行しているうちに、能に魅せられて行って、

いに十五歳のときに能楽に転向したので。

狂言は庶民派でね、着ているものも質素で、主に庶民のできごとがテーマですが、能はドラマとして狂言とは違う次元で作られ、衣装も豪華です。狂言に通常は囃子が入りませんが、能には必ず笛や太鼓の演奏があつて謡い舞います。

金糸銀糸をちりばめた衣装を着ていて、狂言と比べると美にロマンチックなものです。能にひきつけられていった私は、もともとロマンチックだったのかなあ(笑)。

能を始めて見ると、なんだか分からなくて眠くなるのですが、どう見ると分りますか、面白いところのようものがあるところでしょうか

野村 能を見て眠くなるのは、母親の胎内にいるのと同じ気分になるからという説があります。しかも眠くなるのは、演奏がよい時でね。いい気持ちでしょ、眠くなるのは悪い演奏だ(笑)。ま、漠然と見ているのは退屈するでしょうね。だって一歩外の忙い世界と違つて、能楽堂の中はゆるゆると時間が流れている。タイムスリップしている世界を逆楽しんでいるだけばよいのです。

お囃子の音楽が面白い、歩き方が普通じゃない、仮面が奇抜、豪華な衣装だ、いろいろな視点を移しながら観賞していただく飽きませんよ。

一曲が1時間から1時間半くらいですが、初めはテンポがゆっくり、だんだん早くなり、後半で本体が現れて面白くなるのだけど、前半で飽きて寝てしまつ(笑)。

ちょっと難しい言葉だけど、「序破急」といって、リズムが助走から次第に加速する、その繰り返しなんです。1句の中、1節の中、1曲の中にもそれぞれ序破急があるのです。西洋音楽の交響曲だって出だしから急ピッチじゃないでしょ。序曲から始まり、だんだん調子が上がっていく。初めのほうの序の段階は、どつして

も入り口だから眠くなる。

破から急に面白くなるのがねえ。そう思って最初は我慢していただければ、次に楽しい花園にご案内いたしますよ(笑)。この間、フランスで能の公演をしましたが、言葉の違いで分らないとは全く感ぜませんでしたね。

でも日本人だって、能の言葉はわかりにくいものです(笑)。

野村 そういふ点では、かえって外国の方が楽だね(笑)。動きは万国共通に理解ができますからね。でも、能にも動きの約束事があります。例えば「ああ、悲しい」という表現も、ヨヨと泣き崩れたりしません。手を顔の前に持つて行く「シオリ」という型をします。

東南アジアの踊りでも手の動かし方でいろいろの感情を表現しますし、バレエでも型がありますよね。そういう型を追いながら見るのもひとつの方法でしょうね。

でもね、役者のシオリを見て、今この人は悲しんでいるんだなと知るような演技では困る。「シオリだぞ、さあみんな悲しめよ」とブロックサインじゃない、野球しているのじゃない



野村四郎教授
退官記念演奏会

平成16年11月29日(水)午後2時開演(受付 午後1時30分) 東京芸術大学音楽学館(第4ホール)
：公演の都合により先行販売はとさせていただきます。

野村四郎教授東京芸術大学退官記念公演ポスター
2004年1月29日 デザイン：鈴木 薫



上: 野村四郎師によるシオリの型
(撮影: 鈴木薫)
下: 野村四郎師による能「隅田川」
におけるシオリ (撮影: 浅野勝)

だから(笑)。悲しみが先に伝わらなければなりません。とにかく初めは、比較的易しい作品を選んでご覧になるといいですよ。能には鬼退治のおとぎ話もあれば、実に高度で難解な作品まで、みんなそろっています。

初めて見る能が、例えば花の精や老女が主役の作品にぶつかると、これは難解で退屈です。易しいものから見っていくうちに、文章も分るよつに聞こえてくるものです。

外国で暮らしているうちに、初めは分らなかつた言葉も次第に分つてくると同じです。時間をかけて見ていると、必ずこれは面白いといつてよつに到達します。

日本で生まれた伝統舞臺芸術は、日本人に特有の型があるのでしょうか。

野村 だいたい日本人は胸長短足で重心が低い。それが和服を着ている姿をバランスよく見せていたのですね。あまり足が長いとバランスが崩れる。短足胸長の方が、舞台上に落ち着きが出るのですね。そう、足の長い人たちが生み出した芸にバレーがあるね(笑)。バレーは跳躍の芸のよつに思いますが、能は逆に大地に根を生やしているよつな動きが基本です。

「舞い」の原点は「回」に始まると言われますが、四角な舞台を円を描いて行つて、直線と曲線を融合させるのです。ほかの舞台芸術は歌舞伎が典型的なよつに、額縁のあるステージだから横に動くことを主に作られていますね。

ところが能楽では舞台を前後に動いて、真横に動くことばかりありません。舞台が客席に向かつて傾斜していて、そこをジグザグに登つて行くと思つていただくよいでしよう。

能は、舞台を見ている観客が、理解するために努力が必要のよつに思います。舞台装置が何も変わらないので、ストーリーや役者の動きで場面が変わつたことを頭の中にいれないと、その先に行けません。演じるほうも大変でしょうが、見るほうも実は面白くかつ大変なのです(笑)。

野村 なにせ、何もないところに何かを生じさせようとするのですから、演じる方は大変です。今日ではテレビが典型的なよつに、ミカンでも食へながら気楽に見ていると、全部解説してくれて、向つからなんでも分からせてくれるのですね。

ところが能は「無精な芸術」なんです。役者から訴えるけれど、観客に説明はしない。互いに感じ合つたところで運はれて行く。歌舞伎だったら、舞台装置の雪景色もあるし、太鼓のドロオンドロオーンといふ音で雪を表すけれど、能の舞台には一切ないのです。

なにもない舞台に演技の力で森羅万象を生みださなければならぬのです。なにもないところになにも生まれなければ、これじゃつたことにならない。さあ、どうするか。

そのとき役者のエネルギーと観客の感性とがピタッと一致すれば、そこに雪が降り花が咲くことになる。もちろん役者の力

で舞台の良し悪しはきまるのだけれど、役者と観客が呼吸という気が通じ合うことが大切で、能の場合は実は観客も舞台に参加しているところに特徴があります。

だから能は難しいんだ(笑)と、二の足踏まないで下さい。

いやいや、だから能は面白いんだ(笑)ともいえそうですね

ところで、能の作品は、古典ばかりのよつですが、時には新作もありますね。分かりやすい新作が人をひきつけるかも知れません

野村 今ある古典も初めは新作だったのですね。あたりまえだ(笑)。能の題材に適した題材ならば、大いに新作をやるべきです。私も昨年、「実朝」という新作を演じました。高浜虚子の大正時代の作品ですが、まだ上演されていなかったから新作です。分かりやすい題材を新作能としてとりあげて、見ていただきたいと思つています。特に外国で発表するときは、例えばインッブ童話とかシェクスピア芝居などから題材をとるかね。日本の新しい題材もあるでしょう。

古典重視は間違いないことだけれど、それに加えて幅広く新しいことをやっていくべきですね。それで古典が傷つくほどの、弱く貧しい伝統じゃないですよ。

新作をやることによつて、また古きを知ることがあるのです。能楽は古典と言われて何百年も継承されてきていますが、実は全く変つていないのじゃなくて、時代時代のニーズに対応して変つてきているのです。変つてきたからこそ今日があるので。

伝統とは古いものじゃなくて、過去現在未来の世界があるから伝統なのです。過去に決つたものを、寸分たがわず演じたから伝統だといふものじゃない。その時代時代を生きてきて、それでもまだ足りないから未来に向かつて生きる可能性を秘めているところに伝統の強さを感じます。

能のストーリーにはどの様なテーマがあるのでしょうか。

野村 能の大きなテーマは生と死で、これは人生の永遠のテーマなのです。能の分かりにくい原因のひとつに、忠臣蔵のような特定の事件を扱っていないことがあると思います。事件は時間がたてば古くなり消えやすいけど、生と死は人間が生きて



現代の能舞台は、大ホールの中にこのように屋根をかけてつくるが、これはかつては野外で演奏した名残であるう

にぎざんで行くリズムが、途中でハッと一瞬止つたりする。心臓の不整脈みたいだね(笑)。音のないところも音楽として成立しているのです。

だから能は「間の芸術」といえます。「間」とは、実は裏側で、音楽として表れているところは表側です。能は裏側を大事にするものです。例えば鏡を見て自分の前姿を修正しながら練習もするけれど、それよりも背中を大事にする。背中ができていないと実は前もできていないのです。その逆はない。

もうひとつ、実は能にはスレということが大事なのです。合理的に言えば、最初から終りまで間も演技もひたひたと白っているのが完成度が高いといえますが、ステランになつてくると、「間」の許容範囲がひとつじゃなくなると。

例えば、1拍力チツとならして1秒としましょう。普通ならそれで時間が決まるのだけど、ステランになると、その1秒を厚みがあるものにして、そこにスレを起して演技をするのです。水泳競技で0秒以下のタイムがあるね、あれがスレです。あまりにスレしてしまつと駄目だけど、この1秒の中でスレを起すのです。

歌舞伎役者の六代目菊五郎は、とても「間(ま)」の演技のいい人でした。その菊五郎が「間は魔」と言つたそうですが、すごい役者の言いそつなことです。間を魔物とはねえ。

能には間とかスレどが裏とありますが、これを表側だけでやつてしまつと簡単で、分りやすいと思ひます。でもね、分りやすいものがよいものかと言へば、そつとも言えない。分つたから感動したのじゃなくて、分らないけど感動したことに、なにか大きな潜むものがあるでしょう。

そつですね、英語の言葉が分らなくても、トルズの歌に感動します。むしろ、分らないものに直面して「ちひの思いを投げかけ、分らないことが分る」ところに感動があるのかもしれない。

野村 例えばゴッホの絵を見るとしましよつ。あれは本当は題名はいらないと思つたね。見る人が、おおこれは「糸杉」だ、これは「炎の人」だ、自分でつけていけばよいのです。絵が

語りかけてきているのに対して、見るほうがつやつて応えているのです。能も絵画と同じような見方で、動く彫刻として見ていただくよいですね。

とにかく、自分が感動できない人間ではいけません。ニューミュージックでも安室奈美江でも宜しい。自分が感動する体を持つていなければ相手を感じさせることはできません。ですから人に感じさせると言つて高慢ですが、感動と言つものは能を舞っている役者が最高に昇華した現象だと思ひます。

舞台監督の役割は、誰かするのでしょか。舞台稽古はどのくらいするのですか。

野村 舞台監督という言葉はないのですが、主役であるシテ方の役者が全体をまとめる役割を持っています。「申し合せ」といって、公演の直前に出演者が集まつて舞台稽古をいたします。



